

発泡スチロール使用による縫いぐるみ 制作に関する実践報告第2報

——在学生・卒業生アンケートに基づいた分析と改良の検討——

堀 尾 昇 平

The Second Report on the Production of Styrofoam
Life Sized Animated and Animal Character Costumes
—Analysis and Consideration for Improvements
Based on a Survey of Existing Students and Alumni—

by
Syouhei Horio

要旨

本稿は、平成 27 (2015) 年度における保育学科総合演習 (ゼミナール) 授業活動「縫いぐるみゼミナール」授業で行ったアンケート調査、および縫いぐるみ制作の改善に関する報告である。筆者は、主に縫いぐるみ発表を中心としたボランティアを行っている児童研究部の顧問として (1986 年度～至現在)、また保育学科における「縫いぐるみゼミナール」指導教員として (2007 年度～至現在)、劇や研究発表などで使用する縫いぐるみの制作・発表指導をしてきた。現在、筆者が手掛けた縫いぐるみは 30 数体となり、児童研究部のボランティア活動・ゼミナールにおける創作発表会等に欠かせない物になっている。筆者は、様々な制作方法を比較し、特に外形表現に配慮しながら発泡スチロールを使用した縫いぐるみの制作を行ってきた。平成 27 年度、初めて利用者 (在学生・卒業生) を対象としたアンケートを行った。その目的は、頭部内径改善を図り、より被りやすく動作できるように改善するためである。本稿では、「縫いぐるみ使用アンケート」の結果分析・検討と今後の活動への活用について報告を行った。

キーワード：ゼミナール、アンケート、発泡スチロール、縫いぐるみ、ボランティア、
創作発表会

1 はじめに

筆者は、主に縫いぐるみを使った表現発表を中心としたボランティアを行っている児童研究部の顧問として（1986年度～至現在）、また保育学科における総合演習授業の1つ「縫いぐるみゼミナール」（以後「ゼミ」と略記）指導教員として（2007年度～至現在）、劇や研究発表で使用する縫いぐるみの制作・発表指導をしてきた^{(注1)(注2)}。具体的には、発泡スチロールを使用し、軽く、被りやすいことを心掛けて約30体の縫いぐるみの頭部を制作してきた。

その一方で、平成26年度の新作品制作後、縫いぐるみを着用した発表活動を行った保育学科学生より「頭を固定して動きやすいように工夫して欲しい」という指摘を受けた。制作者としては、頭部の発泡スチロールの内側を出来るだけ削り、広い空間を確保した処理を施すことによって全体を軽くすることができ、利用しやすいと考えていた。ところが、着用者は「空間が開いてしまう分、体を動かす時に縫いぐるみの頭部も動いてしまうため利用しにくい」という意見であった。

このように、制作者側の考えと利用者（着用者）側の意見に差があることに気付いたため、アンケートを企画した。アンケートの対象者は、「縫いぐるみゼミナール」受講学生とした。アンケートに対する当初の目的は、縫いぐるみ着用時の改良を図るためであったが、縫いぐるみ制作だけでなく、発表活動の全般について学生の意見を調査する必要があると考えた。そのため、本アンケートの目的は、①縫いぐるみゼミナール全般（運営）について調査し改善を図ること、②縫いぐるみ制作の改善を通じて利用の改善を図ること、以上2つを主眼として平成27年度にアンケート調査を行った。

2 平成27年度「縫いぐるみゼミナール」アンケートについて

2・1 アンケートの対象者・実施時期・設問内容について

アンケート調査の対象となったのは、縫いぐるみを使用するゼミナール学生と本学卒業生である。

前者は、平成27年度「縫いぐるみゼミナール」受講学生で、合計26名（1年生19名、2年生7名）、授業は1・2年生合同で行われ、通年の活動を行った。年度初めの4月にゼミナール所属希望調査を行い、第一希望のゼミナールに所属できるように学科全体で配慮して授業を展開した。

なお、本ゼミナールでは、筆者が縫いぐるみの頭部原型制作・発表指導にあたるだけでなく、学生3名（2年生2名・1年生1名）がリーダーシップをとって行われている。2年生の1名は「リーダー」（ゼミ長）であり、活動全体のまとめ役となっている。もう1名の「副リ

ーダー」(副ゼミ長：2年と1年の調整役)は学生の互選により毎年決めており、1年生1名が「副リーダー」(副ゼミ長：1年まとめ役)としてリーダーを補佐することとしている。活動内容としては2年生が発表内容・制作縫いぐるみ等を決定し、1・2年全員で前期内容(ボランティア)・後期内容(創作発表会)に向け役割分担を決めてゼミ活動を行っている。

アンケートは、前期・後期末に各1回ずつ行った。前期は、前期授業の最終時間である7月29日に実施した。この時期に行った理由としては、2年生は1年半受講した者が大半であり下級生に対してある程度、配慮も出来るようになってきていること。また、1年生については、入学から半期の活動を経ており、7月上旬には学外ボランティア発表も経験し、ある程度活動には慣れてきた頃と考えたためである。後期調査については、一般市民の来場者を対象とした社会活動でもある創作発表会終了後、12月21日、反省会・次年度活動の目標検討を兼ねて行った。

設問内容は、比較できるように前期・後期、同じものとした(図1)。

アンケートの目的と設問の対応については、先に述べた2つの調査目的に対応している。つまり、①縫いぐるみゼミナール全般(運営)に関する調査(設問1活動全般について、4自己成果の確認、5自由記述)、②縫いぐるみ制作を通じた利用の改善に関する調査(設問2今後作って欲しい縫いぐるみ、3利用時の感想)、2つを主な目的として双方に対応した質問を設定した。

2・2 前期授業概要とアンケート調査結果報告

調査結果を報告する前に、前期の活動を概観したい。1・2年生合同の前期15回授業を通じて、後期12月に開催の創作発表会の発表準備に取り組んだ。同時にゼミナールで2回のボランティア活動を行った。1回目は、5月、希望者のみを対象とした「なかべ学院さつき祭」である。2回目は、7月、全員参加による「児童館ひこまる」での発表である。双方、縫いぐるみが登場するダンスを中心に発表を行った。従って、1・2年生合同で、4月から発表に向けてパート練習(縫いぐるみ担当者、ダンス発表者、音響担当者など)、全体練習を組み合わせで練習を重ねた。

前期最終日(7月29日)、前期活動の反省会と後期の創作発表会に向けた夏季休業日直前に行ったアンケートの結果は次の通りである(表1)。

2・3 前期アンケート結果分析

アンケート結果に対して(表1)、授業運営と縫いぐるみ改良、2つの点から分析を行いたい。

【授業運営について】

指導担当者(筆者)が授業運営上、危惧していたのは、「縫いぐるみを使用したボランティ

「縫いぐるみゼミナール」アンケート調査結果 2015. 7. 2 9実施 (n=26, M=男性)									
(回答者内訳)									
1年	2年	3年	4年	合計	男	女	合計	男	女
2	1	7	5	7	4	2	2	2	2
1 前期 縫いぐるみゼミはいかがでしたか。(当てはまるものに○を付けてください)									
学年	よかった	どちらかといえ	ふつう	どちらかと	どちらかと	来年度は他の			
	よかった	ばよかった	いえば考える	ゼミを考える					
1	7	37%	4	21%	6 (M)	32%	1	5%	1
2	6	86%	0	0%	1 (M)	14%	0	0%	0
計	13	50%	4	15%	7 (M)	27%	1	4%	1
・「考えたい」と答えた人は今のゼミで何をしたいですか (回答者なし)									
(1) ボランティアについて (当てはまるものに○を付けてください)									
学年	よかった	どちらかといえ	ふつう	どちらかと					
	よかった	いえばいやだ							
1	4	74%	1 (M)	5%	4	21%	0	0%	0
2	6	86%	1 (M)	14%	0	0%	0	0%	0
計	10	77%	2 (M)	8%	4	15%	0	0%	0
理由	・実際に子ども達と関わった事が良い経験になった (2名)。 やってみて楽しかったし、ためになった (2名)。 子どもに楽しんでもらえた。子どもと関わる機会が持てた。 楽しかった。ゼミ長がまとめてくれてよいものができたと思う。								
(2) ゼミ活動 (大会参加等) (当てはまるものに○を付けてください)									
学年	よかった	どちらかといえ	ふつう	どちらかと					
	よかった	いえばいやだ							
1	9	47%	4	21%	5	26%	0	0%	0
2	6	86%	0	0%	1 (M)	14%	0	0%	0
計	15	58%	4	15%	6	23%	0	0%	0
理由	・音響は楽しい。 ・楽しかった。子ども達も自分たちも楽しめたと思うから。 (回答者なし)								
(3) その他 (運行・プログラム等) (回答者なし)									
2 これから作ってみたい縫いぐるみは何ですか。(「ドラえもん・ドラミちゃん」は除く)									
(1) キャラクター系									
バイキンマン (つのをちゃんとしたい)・メロンパンナちゃん・しまじろうの作り直し。 スヌーピー、マイメロディ、キティ8、よいかいウォッチ、ケロロ、パーマン、 ディズニース (アナと雪の女王)、パンパカパンツ									

表 1 平成 27 年度 前期アンケート結果

(2) 独自のもの	① 動物 (猫・犬・マントヒヒ、ブタ、ゴリラ)
	② 人物 (ウルトラマン等) ストレッチマン、仮面ライダー、のび太、しずか
3 縫いぐるみを着たことがある人に質問です。	
(1) 縫いぐるみに入って動いてどうでしたか。	
①地味はいいですか	良い (1)。見えにくい (2)。アンパンマンは見えにくい。視界が悪い (3)。
②動きやすいですか	バイキンマンの服で後側が重たいのが苦しくなる。動きやすい。腕が上がりにくい (2)。動きにくい。
③その他 (靴を直さないといけない)	(2) 改良するならどうしたらいいですか
	①頭部 (グラグラしないように欲しい。目が見えない)
	②衣装等 (首が苦しくならないように前と後ろの重さを均等にしたい。臭い)
	③その他 (記述なし)
4 卒業後「縫いぐるみゼミ」で習ったことはどのような役に立つか	
	・ダンス等は子どもに喜んでもらえる、手遊びで子どもと関わることができる (2)。 ・手遊びやダンスなども踊れるから子どもにいっぱい教えてあげることができる。 ・ダンスで大きく踊る (2) ・発表の際のダンス。 ・人前で踊るときなどの見本となる大きな踊りができる。 ・何かする前に手遊びが役立つ (2) ・手遊びなどが将来保育者になった時に役立つと思う。 ・子どもに絵本を讀む前に手遊びや子どもが興味を持つようにする点。 ・実習に行ったときに役立つと思う。・人前で話せる。・絵本讀みが上手になる。 ・ボランティアでの運行が現場に出た時に使えたいと思う。 ・ボランティアで子ども達と関わる事が多いのでそれが役立つと思う。 ・雰囲気や盛り上げ方 (2) ・お遊戯会や舞台等をする時に役立つと思う。 ・保育園で発表をする時・運動会・手遊びの種をたくさん知れたから絵本讀みなどの前に役立つ。 ・子どもを喜ばすのに役立つと思う。
5 その他「縫いぐるみゼミ」について思うことを自由に記述してください。	
	・縫いぐるみを着て、ダンスも沢山覚える事ができて楽しいゼミだと思う。 ・明るく楽しいゼミだと思う。・子どもを喜ばせるような授業をやっているから。

ア活動」に対する所感である。後期は創作発表会における舞台発表を中心に活動しているが、前期は「ボランティア活動」に重点を置いていることに対する学生の所感を把握する必要があると感じていた。学年別の観点は、次のように2点ずつ設定した。1年生は、①活動をどのように捉えているのか（対応できていると実感しているのか）、②活動に参加してどのように感じたか。2年生は、①後輩を指導する上級生となり役割を果たしていると感じできているのか、②ゼミナール活動全般に対して今後自分の中でどのような役目を果たしていくと考えているのか。前期は、以上のような観点から調査結果を分析した。

【授業運営に対する分析】

設問1-(1)、前期ゼミ活動におけるボランティア活動（縫いぐるみ発表を含むプログラム）については、1年生19名中14名（74%）の学生が好感を持っていた。2年生は7名中6名（86%）が「よかった」と回答しており、自分たちが後輩を指導した活動も含めて満足していることが分かった。1・2年生を合計すると、全体では26名中20名（77%）が「よかった」と答えていることになるため、ボランティア活動の練習・発表に対して約8割のゼミ学生が好感を持っており、「どちらかといえばいやだ」という回答もない。従って、全員が賛同し、肯定的に捉えて参加していると理解できる。

設問4「卒業後に役立ちそうなこと」に対する回答を通じて、学生が前期学んだことの中で印象に残った事項がうかがえる。前期、本ゼミナールでは、「しまじろう」のダンス、「アンパンマン体操」など、ボランティア活動で行う内容を2年生が考え、それに合わせたダンスや導入の手遊びなどを中心に4月から練習して本番に備えた。この練習も含めて印象深かったことが「手遊びやダンス」という回答が多い理由になったと思われる。

その他にも、設問1-(1)、設問4の回答より、ボランティア活動を通じ、人前に立つことに関する雰囲気作りや、子ども達を楽しませる方法等を学ぶことができることが役立つと考えている記述が目立つ。また、設問1-(1)「楽しかった。ゼミ長がまとめてくれてよいものができたと思う。」と2年生のリーダーを高く評価している記述がみられ、2年生がゼミナール運営を牽引していることを肯定的に捉えていることがうかがえる。

以上の結果や設問1-(2)を見ると、総合的にみてゼミ活動に対して「どちらかといえばいやだ」という否定的な学生はいないことが分かる。前期の活動、すなわち、ボランティア活動を中心とした手遊び・縫いぐるみを使用した発表におけるゼミ活動の内容・運営に対し、1・2年生共に満足していることがうかがえる。

【縫いぐるみ改良について】

設問2、制作に対するアンケート結果に目を向けると、これから作ってみたい縫いぐるみがキャラクターに偏っていることが分かる。「(2) 独自のもの」として、動物という希望も多少あるが、積極的に取り入れたいという意見ではない。

設問3、縫いぐるみ着用発表者によると、「①視界」については、「良い」という回答が1名あるものの、「悪い」「見えにくい」という指摘がみられた。

見えにくい理由の1つ目の理由として、縫いぐるみの目の位置とのぞき穴の関係が挙げられる。縫いぐるみの頭部を作る場合、目の位置は基本的に本体のキャラクターの目の位置に開けている。本体のキャラクターの目とのぞき穴の位置が一致する場合は、目の部分をできるだけ大きく開け、人間が入る内側部分も大きく開けて見やすいように配慮している。但し、縫いぐるみの目の位置が極端に下部あるいは上部にあるため被る人間と異なる場合は、口など、のぞき穴を大きく開けても問題のない場所に設定して制作している。着用者が視界の合わない縫いぐるみの頭部を被った場合、単独では動きにくいいため補助者が誘導するケースが多い。具体例を挙げると、オオカミの縫いぐるみの視界が合わない場合、誘導者が一緒に登場しなければ移動できないため単独で登場できず、縫いぐるみの個性や発表場面と合わない事態が生じる可能性があるということである。

2つ目の理由として、着用者に応じた個別の改造が困難な点である。縫いぐるみは個別使用・単年次使用ではなく、複数学生が多年次にわたって使用するため、特定者に合わせた調節はできない。このように、縫いぐるみの頭部制作については、更なる改良が必要であることがアンケートより分かった。なお、頭部原型は筆者が発泡スチロールを使用して制作するが、頭部の仕上げや衣装は学生が制作する。

設問3、「②動きやすさ」については、「動きやすい」（1名）という回答がある反面、服に起因した「首が苦しくなる」という不快感（1名）、全体的な感想として「動きにくい」（1名）と答えた意見もみられた。先述したように、縫いぐるみ頭部の被りやすさに差が出る事については、頭部本体の個別による形状の違い、学生の身長・顔の大きさ等の体格の個人差にもよることが理由として挙げられる。また、縫いぐるみの衣装についても「腕が上がりにくい」（2名）、「首が苦しくならないように前と後ろの重さを均等にする」といった意見が出ている。最初の制作・発表時に着用した学生の体形に合わせて作っているために、2回目以降に着用する学生と体形が異なる場合、表現・行動の大変さを感じていることが分かった。市販の既製品のように、一定の大きさに制作するという方法もあるが、演者の見栄えが必ずしも良くないため、大きさを定めることは難しいと考える。そのため現状は、上演の都度、練習時に担当学生の体形に合わせてピン・ガムテープなどで留めて大きさを調整しながら使用している。

このように、縫いぐるみの着用については、頭部の「視界」、衣服の「動きやすさ」のどちらにも問題があることが確認できた。

2・4 後期授業概要とアンケート調査結果報告

後期の授業概要と調査状況を中心に説明をしておく。

縫いぐるみの制作状況については、平成27年度には、新しく2体の縫いぐるみを制作したが、発表活動には過去に制作した縫いぐるみも使用した。

後期授業概要については、12月12日(土)創作発表会(於：シーモールホール)での舞台発表を第一の目標として活動を行った。その他、本ゼミナールの関連活動としては、11月22日(日)「第56回中・四国保育学生研究大会」(於：広島文教女子大学)における研究発表(着ぐるみ発表表現)がある。この大会には保育学科学生19名が参加したが、その内本ゼミ所属者10名(2年生15名：本ゼミ所属者6名、1年生4名：全員本ゼミ所属者)を占めた。



写真1 第56回中・四国保育学生研究大会(研究発表ⅡB-6)「着ぐるみ発表表現」発表後に舞台上で講評を伺う参加学生

11月末に行われたこの大会は、中国・四国地区の保育者養成校46校から約1,000名の学生が参加し、合計約50の研究発表(舞台発表・調査研究の口頭発表)が行われた大規模な大会であった。参加学生は自分達が発表し、舞台発表に対する講評も伺った(写真1)。同時に、他校の発表も見学することによって、自分達の現状と比較し、12月の創作発表会に向けて反

省・改善を図る必要性を感じた様子であった。

従って、中・四国大会を経験したゼミの取りまとめ役である2年生のほぼ全員は12月の創作発表会で、より良い舞台を作るために12月初旬から自主的に放課後に残って制作・練習等を企画した。同時に、1年生にも同様に放課後に残るよう要請し、練習指導や縫いぐるみの制作指導等を徹底的に行った。2年生7名の放課後活動は自主的だったが、1年生の内、特に中・四国大会未経験者(15名)は「2年生からの強制的な活動」という感触が否めず、意気込みの差が生まれ、学年によるわだかまりが出来た状態で発表に至った。

調査状況については、12月21日授業時の創作発表会終了後の反省会において、来年度に向けた活動の一環としてアンケート調査を行った。内容は前期と同様だが、設問1の文言を「前期」⇒「1年間」とし、年間活動全体を振り返ることとした。

創作発表会当日は、学生全員の努力によって舞台発表を行ったが、終了後の反省会時には、1年生女子17名中、8名が欠席した。従って、調査対象学生26名中、2年生7名、1年生11名の合計18名が回答したことになる。調査結果は、別表の通りである(表2)。

2・5 後期アンケート結果分析

後期アンケート結果について、前期と比較しながら授業運営と縫いぐるみ改良、2つの点か

「縫いぐるみゼミナール」アンケート調査結果(後期)2015.12.21実施 (n=18, M=男性)

1年	男	女	2年	男	女	総計	男	女	合計
	2	9/17	11	2	5	7	4	14/22	18/26

1. 1年間、縫いぐるみゼミはいかがでしたか。(当てはまるものに○を付けてください)

学年	よかった	どちらかといえ ばよかったです	どちらかとい えよかったです	ふつう	どちらかと いえば考え る	来年度は他の ゼミを考える				
1	3 (M)	27%	2	18%	1 (M)	9%	1	9%	4	36%
2	4	57%	2 (M)	43%	—	—	0	0%	0	0%
計	7	39%	5	7%	1	5%	1	5%	4	22%

・計画を立ててみながら仲良く制作したい (1年女子)

(1) ボランティアについて (当てはまるものに○を付けてください)

学年	よかった	どちらかといえ ばよかったです	ふつう	どちらかといえ ばいやだ				
1	5 (1)	45%	2	18%	4 (M)	36%	0	0%
2	6 (M)	86%	1 (M)	14%	0	0%	0	0%
計	11	61%	3	17%	4	22%	0	0%

理由・子ども前で発表し良い経験ができたから。子ども達が喜んでくれた (1年女子)
 ・子ども達と関わることができた。 ・子どもにも触れ合えたこと (3名)
 ・様々な施設にも行け、沢山の親子と触れ合えたから (2年女子)

(2) ゼミ活動 (大会参加等) (当てはまるものに○を付けてください)

学年	よかった	どちらかといえ ばよかったです	ふつう	どちらかといえ ばいやだ				
1	2	18%	3 (M)	27%	6 (M)	55%	—	—
2	5	71%	1 (M)	14%	1 (M)	14%	—	—
計	7	39%	4	22%	7	39%	—	—

理由・色々な体験ができた (1年女子) ・ボランティア活動などができた。
 ・団結力も強くなったと思うし、たくさん思い出ができた。着ぐるみを作れた事 (2名)。
 ・他校のものも見れて楽しく勉強になったし刺激的だった。(2年女子)

(3) その他 (進行・プログラム等) (回答者なし)

表2 平成27年度 後期アンケート結果

2 これから作ってみたい縫いぐるみは何ですか。

(1) キャラクター系 しまじろうを新しく2、キティちゃん、ジバニャン2
 (2) 独自のもの ① 動物 オオカミ・ヒツジ・ネコ・サル・ゴリラ
 ② 人系 (ウルトラマン等) ウルトランマン (2名)

3 縫いぐるみを着たことがない人に質問です。
 (1) 縫いぐるみに入って動いてどうでしたか。
 ① 肌荒れはいいですか ・ 悪くはない (2名, 1年女子) ・ 真下が見え辛い。
 ② 動きやすいですか
 ・ 首元がピラピラだし肌が見えるから子どもにも言われた。(2名)
 ・ 動きにくい (2名, 1年女子)
 ・ 動きやすい (2名) ・ 「ももかっぱ」は動きやすい。(2年女子)
 ③ その他 (回答者なし)

(2) 改良するならどうしたらいいですか。
 ① 頭部 マジックテープを付けたい (2名)
 ② 衣装等 ・ 着てからの幅や大きさ等の衣装調整 (2名, 1年女子)
 ・ ガリゾーはお腹と胸の所にスポンジを詰めボリュームを出すのは
 今後もやった方がよい。
 ③ その他 (回答者なし)

4 卒業後「縫いぐるみゼミ」で習ったことはどのように役立つかと思いますか
 (1年女子) ・ ダンス等を通して色々学べました。 ・ 子どもに対しての表現。
 ・ 人前(子ども)で恥ずかしがらずにダンスができる。 ・ ダンスを踊ること。
 ・ 踊りを考える。 ・ 先輩たちと協力することが就職先で役立つ。
 (1年男子) 習った事を生かして子どもの心をつかみたい。お遊戯会等で役立つ。
 (2年男子) コミュニケーション力が上がった。
 (2年女子) 体を動かすことの楽しさを伝える。今後の就職で何か制作するとき。
 ・ 縫いぐるみを作るとき身近な物で作れる。 ・ 子ども達と関わるとき (2名)。
 ・ 縫いぐるみを作る事になった際に役立つ。
 5 その他「縫いぐるみゼミ」について思うことを自由に記述してください。
 ・ 洋服など大変だけできてきた時の達成感がある。(1年女子)
 ・ ボランティア等の行事にたくさん参加して学んだ事があります。
 ・ 1年とぶつかることが多かったけれど2年と1年の考えが違ってくる
 よく分かった。(2年女子)

ら分析を行いたい。

【授業運営に対する分析】

設問1、ゼミナール活動全体に対する評価について、1年生の回答について述べる。「よい」が前期は19名中7名(37%)だったが、後期は11名中3名(27%)で、10%減少していることが分かる。また、「他のゼミを考える」という回答は、前期19名中1名(5%)であったのが、後期11名中4名(36%)と31%も増加している。この理由を考える上で、参考となるのは「何をしたいですか」という項目に寄せられた自由記述「計画を立ててみんなで仲良く制作したい(1年女子)」という意見であろう。裏を返せば、この記述をした1年生は、後期の活動現状を「無計画」で「仲良くなかった」と感じていたことが理解できる。つまり、中・四国大会発表参加後、2年生が良かれと思って行った放課後練習を含めて、無計画で不和な状況であったと感じていたことがうかがえる。

これに対して2年生の回答は、「よい」4名(57%)、「どちらかといえばよい」3名(43%)、つまり2年全員が「よい」と回答しており、全員が活動に対して満足しているように見える。但し、設問5、自由記述の中に「1年とぶつかることが多かったけれど2年と1年の考えが違うことがよく分かった(2年生女子)」という意見があることから、本人達なりに意見の食い違いを受け止め、発表や練習に対して温度差があったことを理解している様子がうかがえる。

【縫いぐるみについて】

設問3、「縫いぐるみを着たことがある人」における対象となった「縫いぐるみ」は、もともと平成3年、4年頃に制作した作品であり、前期の縫いぐるみとは異なった物である。縫いぐるみの頭部は最初に貼っていた布をはがして再利用した。演者が被った時ののぞき穴は、縫いぐるみ頭部の「口」の位置になっている。頭が入る内部空間は、比較的広く開けてあるため、呼吸がしやすい代わりに着用者が動いた時に縫いぐるみの頭部全体が動きやすいという欠点があった。そのため、制作当初は、着用者がタオル等を頭・首に巻くことによって、動いた時に縫いぐるみ頭部がずれないように固定していた。

但し、①視界に関する設問では、「真下が見え辛い」といった見え辛さだけでなく、②動きやすさに対しても「動きにくい」(2名)、「首元がビラビラだし肌が見える」(2名)といった不便さを抱えながら上演していることがよく分かった。本番の発表時には、縫いぐるみ頭部の内部空間にヘルメットを入れて着用者の頭が動かないように学生が調整して発表を行った。

3 卒業生に対する縫いぐるみ利用アンケートの実施について

3・1 利用アンケートの目的と実施概要について

先述したように(2・1)、本ゼミナールで使用している縫いぐるみは、本学卒業生が就職先の事業所・施設などで使用する際に希望があれば、貸し出しを行っている。そこで、平成27

年度の在学生に行ったアンケートを基にして同時期、卒業生に対しても縫いぐるみの使用に関するアンケートを行い、改善を図ることとした。

アンケートの設問は7つで、内容は「1 使用施設名」「2 使用目的」「3 使用した縫いぐるみ」「4 使用した感想」「5 着た人への質問」「6 使ってみたい縫いぐるみ」「7 その他感想・意見」である。設問5・6は、学生に行ったアンケートの内容（設問2「これから作ってみたい縫いぐるみ」、3「縫いぐるみを着た人への質問」と対応している。対象者は実際に使用した卒業生で、アンケート方法は縫いぐるみ返却時の聞き取りによる調査が主であった。回答件数は3施設4件で、1施設が違う縫いぐるみを2回借りたため2件の回答数となっている。貸し出しの目的は、行事に伴う発表のための使用である（学園祭・運動会・クリスマス会など）。

3・2 利用アンケートの結果と分析について

卒業生に対する縫いぐるみ利用のアンケート結果は別表に示した通りである（表3）。

この結果に基づき、在学生アンケート結果と対応できるように「使用全般について」「縫いぐるみについて」2つの面から分析を行う。

【縫いぐるみの使用全般について】

設問3から分かるように、施設現場への貸し出しは、全てテレビ放映されているアニメーションのキャラクターである。また、設問4・設問7における感想・意見に「3体借用させてもらったので会場内が華やかになりとても盛り上がった」「キャラクターで知っている着ぐるみだったので、会えてうれしかった」とあるように、保育現場では、子ども達や利用者に親しみがあるキャラクターの使用が重視されていることが分かる。但し、キャラクターに関しては著作権の問題があることも事実である。キャラクターの縫いぐるみ作成は、授業の一環として作成・発表しているが、一般公衆に貸す場に提供するために学生と共同で制作・発表することは非常に困難である。

その他、卒業生の観点で注目されるのは、設問7の「制作に丁寧な仕事がほしい」という意見である。縫いぐるみ頭部の土台づくりは指導担当教員（筆者）が行うが、仕上げの布貼り等の作業は、学生が授業時に行う。学生の中には、上演時のことまで想定せずに作ったり、授業すなわち自分が不得意・不本意な作業として取り組んだりする者もいる。指導担当教員（筆者）が、制作に関して指導を行っているが、全員が細部まで丁寧に作業していないのが現状である。卒業生は、保育現場の社会人として使用するため、意識の違いによって、求める完成度に食い違いが生じてしまうと考えられる。

このように卒業生からみれば完成度にやや不満は残るものの、設問5の中に「着ぐるみの中は暑くて大変でしたが、沢山の人の笑顔が見られたので良かった」という回答があることから着用者・来場者、双方が喜び、施設の行事に役立っていることがうかがえる。

下関短期大学保育学科卒業生「縫いぐるみ」利用アンケート集計結果
平成27年度実施 (n=4)

- 1 縫いぐるみを使用した施設名(場所)
 - ・児童養護施設なかべ学院 (下関市)
 - ・障がい者支援施設ひびき学園 (北九州市若松区)
 - ・武久病院院内保育キッズハウスなぎさっこ (下関市)
- 2 使用目的(内容)
 - ・学園祭(着ぐるみ写真撮影会)(ひびき学園)
 - ・運動会・クリスマス会(なかべ学院・なぎさっこ)
- 3 使用した着ぐるみ(施設ごとの記述)
 - 「カレーマン・食パンマン・バイキンマン・ウサギ・ブタ」
 - 「はなかつぱ・ももかつぱ・ガリゾー」
 - 「ミーニャ・メーコブ・ムテ吉」、「ドラえもん」「クレヨンしんちゃん」
- 4 使用した感想(任意)

3体借用させてもらったので会場内が華やかになりとても盛り上がった。
- 5 縫いぐるみを着たことがある人に質問です。
 - (1)縫いぐるみに入って動いてどうでしたか。
 - ①視界はいいですか：もう少し視界が確保できるといい。
 - ②動きやすいですか：誘導係とペアになって手を繋いで終始行動した。
動作的には特に問題なく動くことができた。
一人で行動ができた。
 - ③その他：着ぐるみの中は暑くて大変でしたが、沢山の人の笑顔が見られたので良かった
 - (2)改良してほしいところはどこですか。
 - ①頭部 ・頭部の閉鎖感が気になり、最初は怖いくらいだった。もう少し中に余裕がある
といいなと思いました。
 - ・はなかつぱの頭頂部がはがれていたので接着剤で補修した。
 - ・平成27年12月に借りた「しんちゃん」の頭部は使いやすかった。
 - ②衣装等 男性にはサイズがきつかったようだ。
 - ③その他 (回答なし)
- 6 これから使ってみたい縫いぐるみは何ですか。
 - (1)キャラクター系 ・マイメロディ・ミッファイ
・キティちゃん・リラックマ・くまもん
 - (2)独自のもの
 - ① 動物 犬
 - ② 人系(ウルトラマン等)ウルトラマン・仮面ライダー・戦隊もの
- 7 その他、ご意見をお聞かせください
 - ・制作に丁寧な仕事がほしい。(子どもはよく見えていますから)
 - ・実際に入った人からも、お客様からも「とても楽しかった」との声をいただきました。
 - ・キャラクターで知っている着ぐるみだったので、会えてうれしかった。(お客様の声)
 - ・同シリーズでペアやトリオになっていることで、お客様が大変喜んでおられた。

表3 下関短期大学保育学科卒業生「縫いぐるみ」利用アンケート集計結果

【縫いぐるみについて】

縫いぐるみの衣装については、設問5(2)②「男性にはサイズがきつかったようだ」という回答があった。先に述べたように(2・3)、縫いぐるみの衣装は、最初に着用する学生の体形を基に作っている。男子学生が着用することも多いが、女子学生が入る場合もある。また、履物の大きさも後日の利用を考えていないものが多い。現在、縫いぐるみ用の足の部分や履物(靴)の作成については、縫いぐるみ制作業者がスリッパを土台として作成し、誰でも着用できるようにしている。

縫いぐるみの頭部について、設問5(1)、「もう少し視界が確保できるといい」という学生と同じ問題を提示されている。また、設問5(2)「頭部の閉鎖感が気になり、最初は怖いくらいだった」という頭部内の空間の狭さを指摘する回答があった。縫いぐるみの着用者に圧迫感や恐怖感を与えていることは、疎かにはできない現状であるため、改良の必要性を痛感した。

4 縫いぐるみ頭部改良について

4・1 アンケート実施前の縫いぐるみ頭部制作について

一般的に、縫いぐるみ頭部の制作は、筆者が使用している発泡スチロールではなく、他の素材加工(ウレタンやシリコンを使用した加工等)の方が多用されている^(注1)。その理由は、頭が入る空間を広く取りやすく、細かく成形できるためである。但し、手軽に成形しにくい

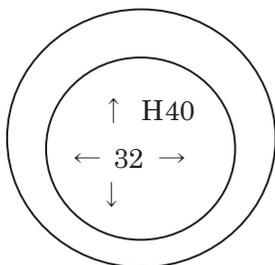


図2 縫いぐるみ「ポロリ」頭部内径図
(平成2年制作)
(図内の数値の単位は全て「cm」)

ため、筆者は入手・加工しやすい発泡スチロールを素材とし、スチロールカッターや小刀を使って制作している。但し、欠点は、あまり薄く削れない事や細かい表現が難しい事である。その理由は、薄くすると強度が不十分になる事、細かく彫刻した場合でも表面に布等を貼ってしまうために小刀で成形した部分は隠れてしまう事である。

平成3～4年頃、筆者が縫いぐるみ頭部の制作を始めた頃は、頭が入る空間をなるべく広くとるようにしていた(図2)。それに伴い、着用者がタオル等で動かないように頭部を固定して発表していた。

それでも「動く」と頭がずれる」という指摘があったため、内径を改良した(図3・写真2、図4・写真3)。これらは、内径を中心とした改良である。内径空間を少し狭くして頭がずれないようにした。

その後、筆者が発泡スチロールの加工に慣れるに従い、縫いぐるみ頭部と身体のバランス、あるいはキャラクターの体形に配慮するようになった。つまり、頭部が大きすぎると着用者である人間の体形と合わないが、キャラクターの体形は2頭身～3頭身である場合が多いという

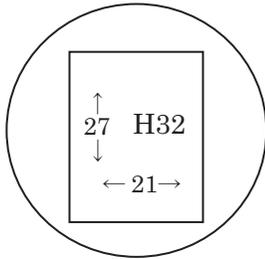


図3 縫いぐるみ「ドラえもん」頭部内径
(平成3年制作)



写真2 縫いぐるみ頭部内部「ドラえもん」
(平成3年制作)

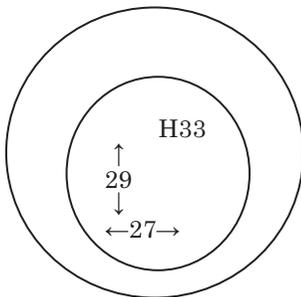


図4 縫いぐるみ「ドナルド」頭部内径
(平成5年制作)



写真3 縫いぐるみ頭部内部「ドナルド」
(平成5年制作)

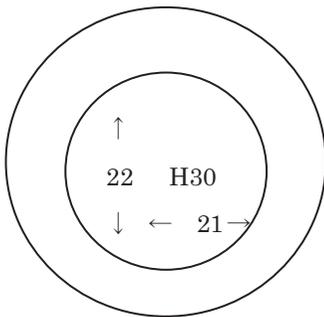


図5 縫いぐるみ頭部内径「しまじろう」
(平成6年制作)



写真4 縫いぐるみ頭部内部「しまじろう」
(平成9年制作)

差異の調整をどのように行うのか、という点である。そこで、少しでも差異を埋めるために縫いぐるみを最初に使用する時の台本や内容に沿うように配慮することとした。その結果、縫いぐるみ頭部は着用者の学生が演じやすいように徐々に小さく制作するようになった。頭部全体

が小さくなったことに伴って内部空間も若干、縮小させた。

頭部が極端に小さい縫いぐるみの例として平成7年頃に制作した「ウルトラマン」が挙げられる（内径19×20×H29cm）。この作品は、現在下関短期大学付属第一幼稚園の運動会用に制作し、その後展示されている。テレビ放映では成人男性の体形を生かした縫いぐるみが着用されているため、筆者が発泡スチロールで制作した折には、外面に布を貼らず、塗装のみ行った。また、頭部の内部空間は大変狭く、着用者と発泡スチロールの頭部との隙間が殆ど無い状態であるため、息苦しく感じたのではないかと思う。その後、縫いぐるみ頭部の外形の大きさは変えずに内径空間のみを小さくして制作した（図5・写真4）。

これらの縫いぐるみ頭部は、内径が小さ過ぎたため、着用者の呼吸が苦しくなりやすいので、空気口を開けて使用した。

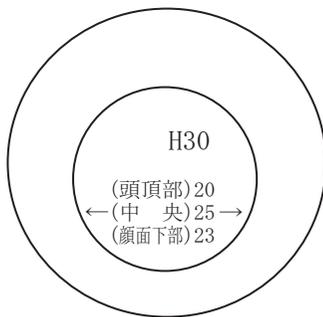


図6 縫いぐるみ頭部「アンパンマン」
（平成15年、新たに制作）



写真5（参考）縫いぐるみ頭部内部
（平成25年、内部直径に変化を付けて制作）

従来、頭部作成については発泡スチロール板（10cm厚）4～5枚を積み重ねて制作してきたが、平成15年以降は、制作時に発泡スチロールで中をくり抜く時、入口部分（1枚目）・中央部（2枚目）・頭頂部（3枚目）、に開ける穴の直径に変化を付け、三枚を重ねて接着した（図6、写真5）。それ以前は、同じ直径にした板を重ねて筒状に制作していたが、入口の直径を狭く、中央（鼻、目部分）を広くして空間を取ることで、以前よりも内部空間を広げて被りやすくすると共に、頭頂部を狭くして着用者の頭の位置が安定しやすいように工夫した。

4・2 アンケート実施後の縫いぐるみ頭部改良について

平成27年度実施アンケートを通じて、縫いぐるみの頭部の改良について、卒業生からの「もう少し視界が確保できるといい」という意見に着目した。

制作時における視界への配慮については、筆者が制作時に必ず一度被り、見えるかどうか確認する。縫いぐるみの目の位置に着用者の「のぞき穴」をあけた場合、前方はよく見えるが下は全く見えない。その場合、誘導者が必要となってしまう。しかし、縫いぐるみの「口」にあ

たる部分に穴をあけた場合、下方向は見えやすいため足元を着用者自身が目視しながら歩きやすい。但し、下を向きながら歩くことが多く演技指導が必要になるという短所もある。「口」にのぞき穴を開けた場合、上部・左右が見えにくいという不便さがある。これらを総合的に考えて、現在はなるべく目の位置に穴を開けている。その上、着用者が被る内側の目の周りを極力広くすり鉢状に削ることによって、少しでも広い視界を確保するように努めている。

着用者の呼吸確保については、試行錯誤が続いている。内部空間の広さは、先に述べたように考慮してきたものの良い結果を得ることは困難であった（4・1）。

しかし、平成28年度は、頭部の基礎部分を発泡スチロールで加工した後、表面に布を貼る作業に注目して制作を行った。つまり、頭部の基礎部分は、表面に布を貼る分、強度が増すため、発泡スチロールの幅が多少薄くても、強度に問題はないことが完成作品を再点検する中で次第に分かってきた。強度が増す理由は、布の強度が加わるだけでなく、接着剤にもあると考えられる。発泡スチロールに布を貼る時、有機系接着剤はスチロールが溶けるため水溶性接着剤を使用する。水溶性接着剤が乾燥すると、布の間に塗られた接着剤が凝固して接着するため、凝固した分、強度が高まるのである。接着材の凝固作用は、以前から熟知していたが、この作用を縫いぐるみ頭部の強度を高めながら内径を広げるという改良に繋げることを試みた。具体的には、内側の空間を頭の形に合わせ直径1～2cm上下左右に広げ、頭頂部は逆に1～2cm低めに設定して顔面部分を広く確保した作品を試作した（図7・写真6）。

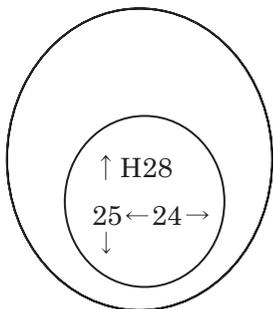


図7 縫いぐるみ「クレヨンしんちゃん」
頭部内径（平成28年制作）



写真6 縫いぐるみ頭部内部（平成28年制作）

この平成28年度に制作した縫いぐるみ頭部は、同年の創作発表会で使用したが、その他にも下関市内事業所にクリスマス会用に貸し出しを行った。

着用した卒業生によると、「内部空間の状態が良くて圧迫感を感じず、使用しやすくダンスも可能であった」という高い評価を受けた。従って今後、発泡スチロール製の頭部制作は、平成28年度に試作した内部空間寸法と接着の重視を併用しながら制作したい。

今回は、十分に改良できなかった点としては、着用者の頭の固定がある。先述したように筆

者は、土台となる3枚の板にあける穴の幅を変えて工夫してきた(4・1)。しかし、素材としているのは発泡スチロールであるため、軽くて加工しやすいという長所がある反面、着用者の頭を内部で固定しにくいという欠点は完全に克服できていない。

業者の制作物には、素材としてビニールやシリコンが使われ、頭部は薄く内部空間は広く取るように工夫されている。また、着用者が被りやすいように、内部にヘルメット等を付けて固定しやすくなっている。

筆者が素材としている発泡スチロールの場合、頭部の内側は削りにくいということもあり、ヘルメット等を接着するのは難しい状態である。そのため、着用者が頭部にタオル等を巻き、動いた時に縫いぐるみがグラグラしないように固定しているのが現状である。その他にも、内部に座布団用のスポンジを万能接着剤で接着して頭を固定しようとした試作品や、頭部の端にマジックテープを接着剤で固定し、ヘルメットのように顎紐を付けた試作品もあるが、決定的な改善策はなく、全ての縫いぐるみに対応できないのが現状である。そのため、懸案となっている頭部の固定を含めて、被りやすく圧迫感がなく、呼吸が確保しやすく、視界が良好で動きやすい縫いぐるみの制作を今後も課題としたい。

5 おわりに ―今後のゼミナール運営と頭部制作について―

本稿では、筆者の担当している「縫いぐるみゼミナール」が行ったアンケート結果に基づいて活動の方針や平成28年度に行った頭部の改良について報告した。

ゼミナールの運営に対する今後の展望としては、上級生・下級生の意志疎通をより活性化して一体化を図ることである。筆者は、児童研究部の顧問も務めているが、同部は、中・四国学生研究大会で多数の発表をしてきた実績がある^(注2)。部員の学生は、ボランティア活動で発表技術を磨き、研究大会での発表に向けて自主的に活動をしてきた。学生自らが自信を持ち、自主的に活動する学修体験こそが、現場に対応できる保育者を養成するためのアクティブ・ラーニングであると考えている。短期大学の在学期間は2年間であるため、上級生から下級生に体験や経験を引き継ぐ期間は短い。だが、今回のアンケートで得られた知見、すなわち学生側の自主的な「計画性」「協働性」を重視しながら、今後もボランティアや発表を通じた学修を展開したい。

また、縫いぐるみの頭部改良については、制作者である筆者が従来重視していたのは、外形形成であった。しかし、今回のアンケート結果を通じて着用者の利便性つまり、視界・呼吸の確保、圧迫感からの解放、「頭を固定して動きやすいように工夫して欲しい」といった動作のしやすさに対しても、更に注目しなければならないことが良く分かった。アンケート結果を検討することによって頭部内空間サイズの重要性が分かったことは大きな収穫であった。

平成 28 年度の制作は、主に縫いぐるみ頭部の閉鎖感の改良に努めたが、今後は視界の確保、動きやすさ、頭部の軽量化についても更に検討したい。

謝辞

本報告の作成にあたりご多用な中、アンケートにご協力いただいた事業所（児童養護施設なかべ学院、障がい者支援施設ひびき学園、武久病院院内保育キッズハウスなぎさっこ）に対し、謝意を表します。同時に、ご指導いただいた堀尾紀之氏、高杉志緒氏に対して、記して感謝いたします。

注) 参考文献

- 1) 堀尾昇平：発泡スチロール使用による縫いぐるみ制作に関する実践報告「下関短期大学紀要」,33 , pp.25-35, 2015
- 2) 堀尾昇平：児童研究部における社会活動の報告「下関短期大学紀要」,30,pp1-12, 2012